

## ノルウェーの水産諸事情

(水産の21世紀・京都大学学術出版～ベルゲン大学生物学部 上坂裕子)

私は現在ノルウェーに住んでいるのだが、まず手短かに私とノルウェーとの出会いをお話したい。海外へ出てみたいという思いが昔からあった私がノルウェーに興味を持ったきっかけは、ポップグループのA-haがノルウェー出身であったこと。その後、ノルウェーにはフィヨルドや白夜があること、社会福祉が整っていること、女性の社会進出率が高いことなどを知り、あこがれが強くなった。

ノルウェーは漁業国なので、水産学科に進めばノルウェーに行くことが出来るかもしれないと考えた大学受験で、運よく水産学科に入ることが出来た。

そして恩師の田中克 先生のおかげで修士課程の間に一年間留学することができ、その間に知り合ったノルウェーの彼と結婚し、現在は2児の子育てをしつつ、週3日の研究職を続けている。働く女性が働きやすい環境が整っていることを肌で感じているわけだが、その理由を幾つかあげると、①育児休暇を有給で取れること、②父親も育児休暇をとることが義務付けられており、③保育園や幼稚園に入りやすいこと、そしてなんと④残業は殆どなく、定時に帰宅できることがあげられる。そして、父親も定時に帰宅できるので、共働きしやすく、家庭で過ごす時間を大切にしている。

さて、ノルウェーは日本同様に国土の大半が海に面しており、昔ながらに漁業国である。現代では、石油、天然ガス関連が主要輸出産業だが、漁業は産業として重要な位置を占めている。今までの伝統的なタラ、ニシン、サバなどの漁業に加え、サーモンを主とする養殖魚の輸出量も増加の一途である。近年はチリのサー



▲ ノルウェーのサケ養殖場

モン養殖が疾病により大きな打撃を受けており、そのために、世界的な不況にもかかわらずノルウェーサーモンの需要はさらに増しているそうだ。2007年には、養殖魚の生産量が天然魚を上回るようになった。

その一方、サーモンに続く養殖対象魚として、オヒョウ、ターボットなどが挙がってきたが、ここ数年はタラにかなりの注目が集まっていた。